

道免和久 (監), 竹林 崇 (編)

行動変容を導く！ 上肢機能回復アプローチ —脳卒中上肢麻痺に対する基本戦略

山 本 伸 一

(山梨リハビリテーション病院, 作業療法士)



脳卒中上肢麻痺対象者の ADL の可能性が広がる一冊

OT になって約 30 年。就職当時、脳卒中上肢麻痺に対する機能回復アプローチという概念は、当然ながらほぼ存在せず、いわゆる健側志向のリハが主流であった。しかし一部の療法士は麻痺側の潜在性や可能性を信じ、試行錯誤していたのも事実である。自身もその一人であった。

1980 年代よりサルやヒトに対して神経の除去・感覚の遮断や関節の固定等を行い、身体の変化だけでなく、大脳皮質等のマッピングが変化するといった論文が数多く発表された。なかでも 1996 年、Nudo らは「サルに対して巧緻動作の練習 (CI therapy-like-procedure) を実施し、一次運動野における手指の領域が拡大・変化する」ことを発見した。言わずと知れた CI 療法 (constraint-induced movement therapy) の始まりである。これは、脳卒中対象者を担当するすべての療法士に大きな希望、そして患者にとっても光となったことはいままでのま

い。

そしてこのたびの本書の出版である。監修の道免和久氏は、日本のトップクラスのリハビリテーション医、そして編集の竹林 崇氏は、2012 年に CI Therapy Training Course に参加し、臨床と研究を重ねながら、多くのジャーナルや書籍の執筆や学会の講演等で活躍されている期待の OT である。

道免氏は、「書名には、あえて CI 療法やニューロリハビリテーションという言葉は入れていない。将来的に本書で示したコンセプトがリハビリテーション全般に広がることを期待している」と述べている (本書「監修の序」より)。凝り固まった概念ではなく、対象者の可能性と普及への熱意が込められていると感じた。

本書は全 6 章で構成されている。第 1 章では課題指向型アプローチと transfer package を含む CI 療法の効果とエビデンスを紹介している。その後は、概要と実践のあり方や効果を計測するアウトカムにつなげ、さらには最終

章の実際例に至るまで、基礎・基本から応用までもが解説され、研究と臨床の橋渡的存在となっている。

脳卒中上肢麻痺に対する機能回復アプローチは、われわれ療法士にとって長年の課題である。軽度だけでなく重度の痙性や弛緩、痛みや感覚過敏・鈍麻・脱失、失調症、振戦等、対象者によって症状は十人十色である。そして対象者はやはり、動けないより、動けたほうがよい。それが生活に活かされればなおさらである。ADL アプローチだけが手段ではなく、全人的・包括的に対象者をとらえることが大事である。解決する手法はたくさんあっていい。選択肢が多いほど未来は変えられる。

本書は、リハの可能性をさらに上げるきっかけとなるであろう。そう確信した。ぜひとも熟読いただきたい「渾身の一冊」である。

B5 判 304 頁 4,000 円 + 税
医学書院 刊
☎ 03-3817-5650